



## 2021 年度トレーナー検定試験 試験結果講評

2022 年 3 月 7 日

特定非営利活動法人 小学校英語指導者認定協議会  
トレーナー認定委員発行

### 実技試験

オンラインでのトレーナー検定試験 2 年目であったが、受験者全員がデバイスや回線の環境を十分整えて実技試験に臨むことができた。オンライン授業で動きのある活動を取り入れる場合、スクリーンの画角を意識することが必要である。画面のどの位置にいればいいか、また画面越しでどのようなジェスチャーが効果的かなどを考えたい。

実技試験では授業の「導入」部分を英語のみで 5 分間行うが、事前配布資料に明記されているように、「導入」とは本格的な授業に入る前に、児童に題材に対する興味・関心を持たせる活動である。指導者の口頭での導入が「つかみ」となり、「今日はどんな活動をするんだろう」「自分も英語を使ってみよう」と児童のワクワク感が高まるような発話の工夫が望まれる。最初の挨拶から始める必要はなく、挨拶やウォームアップが終わり、本時の活動に入るところが実技試験の「導入」部分と見なされる。児童が本時の授業への見通しを予測し、関心・意欲が高まるようにトピックや言語材料を示している模擬授業は高く評価された。また、模擬授業では、適切な Teacher Talk を使うことを心がけてほしい。わかりやすい英語で授業を進める受験者が多かった中、残念ながら、発話や児童への問いかけの英語が正確ではない受験者も見受けられた。また、学年に応じた発話の速さや英語表現を工夫することも必要である。例えば、5 年生で扱う題材の場合、既に 2 年間外国語活動の経験があることから、幼児を対象としたようなゆっくりすぎる発話はあまりふさわしくないと考える。

コメント・アドバイスでは、ほとんどの受験者が持ち時間の 3 分を有効に使って、授業でよかったことや改善すべき点を的確に指摘できていた。自身の指導経験を持ち出して「このようなこともできる」というような具体的で建設的なアドバイスも多く見られた。実技試験では、模擬授業とコメント・アドバイスが同配点になっている。コメント・アドバイスでは、授業のよかった点を評価して指導者を勇気づけると共に、授業改善のために説得力、そして思いやりのあるフィードバックも必要である。トレーナーからの問いかけで授業者が省察し、自ら気づき、指導改善につながるようなコーチングを期待する。日頃から「人を育てる」という視点で、児童や指導者と関わり合いをもつことを意識してほしい。

## 口述試験

### 領域 1

領域 1 は、第二言語習得の理論に基づいた指導ができるかを測る部分である。したがって、基礎的な概念を「理解している」ことがまず求められる。1 番の「コミュニケーション能力」については、ほぼ全ての受験者が Canale (1983) の 4 つの下位分類のモデルを引用して説明しており、基礎的な理解は問題なかった。もちろん他の研究者が提唱したコミュニケーション能力のモデルで説明しても良い。重要なのは、狭い意味での言語能力以外にも、不可欠な構成要素が英語のコミュニケーション能力にはあるということである。しかし、教育現場へ対しての具体的な指導の要素を欠いては、トレーナーとしては足りないと感じる。コミュニケーション能力を規定するというのは、児童が言語習得をゴールや道筋を示すことである。それらを明確にすることで、検定教科書にある内容や領域 2 でも問われた「言語活動」が、最終的なゴールであるコミュニケーション能力の獲得に一本の糸でつながっていくのである。このレベルでの解答は残念ながら少なかった。

2 問目は、より実践的な指導に結びついた問題で、音声指導について問うたものである。今回は単音の正確さ以外の音声指導について問いかけをした。いわゆる suprasegmental (超文節) な音の特徴をどのように指導していくかという問題である。これには、音連鎖、リズム、イントネーション、抑揚などがあり、どの受験者もきちんと指摘できていたと思う。また、それを指導するためにチャンツや歌などを使い大きな単位での音の流れに児童を慣らせていくという手法など、問題の狙いを理解した解答も多くの受験者から得られ、現場経験の豊かさがうかがわれた。ただ、気になったのはほとんど全員が、「良質なインプットを与える」ことの重要性、児童の音の間違いに対して recast の中で間接的に間違いを正していくという手法、子どもの発達段階を考慮しつつ scaffolding (足場かけ) をすることを心がけると最近流行のキーワードを解答の中に含めたことだ。間違っているわけではない。しかし、そこには「児童にはこう教えるべき」という絶対的パターンが存在し、熟練した教員ほどそのパターンを遵守して教えているかのような印象を受ける。理論の応用の仕方がやや画一的になっているように感じたが、本来第二言語習得の分野はそれらより遙かに豊かな理論を提供してくれるものであり、それを広く学ぶことによって教育現場の条件や学習者に適した指導をできるようになっていただきたい。

### 領域 2

領域 2 では、学習指導要領に照らして基本的かつ重要な事柄について、具体的な事例を挙げて説明し、その意義や留意点を論じる設問であった。小学校での外国語 (英語) が 2020 年度から教科となり、現場における指導に関してはいまだ手探りの状態である。そのため、トレーナーとして小学校英語教育に関する十分な知識を持っていることは必須となる。小

学校英語についての現状の理解や学習指導要領の知識などはいずれの受験生もある程度有していた。学会や研究会、セミナー等で自己研鑽を積んでいるであろうことが回答から伺えた者も多かった。受験生が口述試験に向けて必読書と参考図書を読み込み、それに加えて文科省が発信している最近の資料や動画からの情報にもアンテナを張って学び、丁寧な準備をしたことが伝わった。そのような資料に挙げられていた例を示した受験生もいた。しかしながら、教員研修などを想定した場合、小学校教員であればすでにそのような資料や事例は知っているであろう。トレーナーは小学校現場に向けて、実践に基づいた説得力のある発信を行う指導的な役割が求められる立場である。教科書的な回答を超えた、トレーナー自身が実践を積み上げてきた中で体得した具体的な実践例を示すことが必要である。目指すべきトレーナー像とは、自らが得たその知識を具体に落とし込み、現場において活用できるものとして他の指導者に伝えることができる者であろう。その点で、知識や技能を積み上げ、自分が「知識・技能」を持っていることをただ一方的に示すだけでは不十分である。知識や技能を現場に還元してゆくための具体的な実践例を自分もっていること、自分の経験や知識を客観視し、現場の実践に還元できる要素を抽出し、わかりやすく具体的に示すことが期待される。さらに、それを説得力を持った話し方での確に伝えるプレゼンテーション力も必要となる。

### 領域 3

領域 3 では英語指導法の知識と、英語運用能力が同時に問われるので、配点は最も高く設定されている。今回の設問は課題テキスト *Teaching Young Language Learners* の言語の発達順序に関する抜粋文をまず音読し、その内容から、専門知識と英文を読み取る力を問うものだった。最初の音読は、正確さ *accuracy* と流暢さ *fluency*、意味のまとまり・チャンクごとに区切って読めているか、相手に伝わるように読めているか等のポイントを、どの受験者もほぼクリアしていた。設問 1 は *universal order of acquisition* とは何かという問いで、言語の発達順序 *developmental sequences* の知識があれば、答えられるものだったが、ここでの正答率は低くなった。第二言語習得理論の U 字型発達曲線に言及していたケースが複数あり、減点対象となった。*universal order* の意味を読み取ることができ、形態素の知識があれば、大きなヒントになったが、*'ing* や *third person singular 's* などの「習得順序」と「習得過程」の概念がすり替わってしまうケースが見られた。一方、理論を良く理解し、自然順序仮説 *natural order hypothesis* について説明した受験者は、加点がつき、高く評価された。設問 2 は、学習者の形態素の間違いが繰り返されることに指導者としてどのように対応するか、を問うものだった。回答として多かったのは、インプットを重視しアウトプットを待つ、リキャストをして気づかせる、等であった。しかし、ここで大事なものは、どんなに教えても、ある形態素は定着しない時期があり、指導者が指導すれば学習者は学ぶとは限らない、というポイントである。「ほおっておく。できたら、良かったねとほめて、よい成功体験に導く」と回答した受験者は高い評価を得た。

## 全体講評

〔J-SHINE が目指すトレーナー像 〕

- ・ 小学校英語教育に関する十分な知識を持っていること
- ・ 小学校外国語・外国語活動の指導者として十分な指導技術を持っていること
- ・ 高いコミュニケーション能力を持ち、指導者への適切なアドバイスができること
- ・ 英語で指導者研修ができる英語力があること
- ・ 共生社会に貢献できる協調性があること

トレーナー検定試験においてはスキル(技能)を実技試験で、知識を口述試験で測る、と知っている受験生がいるかもしれない。しかし、オンラインでの実施となり資料を参照できる形式となった中、単なる「知識」のみを問う出題ではなくなった。口述試験では、十分な準備をしたうえで、蓄えた知識をどのように自分の中で体系化し、自分の実践とつなげ、論ずることができるかが問われている。「知っている」「わかっている」だけでは足りない。指導者として、いかに相手に「伝え」「教え」「共感を呼ぶ」ように語るか、という視点が必要である。さらに、自分の発信が相手に響き、実際の現場での指導に反映されるためには、自分の持っている知識や考えを効果的に相手に伝えるプレゼンテーション能力が必須である。オンラインの画面上ではあるが、相手を意識した話し方ができているか、相手にどのように自分が見えているかなどの「相手意識」を持った話し方が求められる。2分、3分といった制限時間を余すことなく活かし切り、内容の濃い回答をするためには、文を短く切り、端的に要点を話す意識も欠かせない。トレーナーを目指す方には、日頃から「知識・技能」に加えて「思考力・判断力・表現力」も「学びに向かう力・人間性」も意識した発言や回答を行うことを習慣化してゆくことを強く勧めたい。

以上